

大学情報環境利用マニュアル類における日本語表現をめぐる

大足 恭平

早稲田大学メディアネットワークセンター

kotoito@aoni.waseda.jp

概要： 大学の学術・教育環境においてコンピュータおよびネットワークの利用は必須となっており、各大学ともさまざまな工夫を凝らし、その基礎的な利用方法から情報セキュリティなどを含めてリテラシーにかかわる情報までを含むマニュアルを用意している。早稲田大学では「PC・ネットワーク利用ガイド」として発行しているが、本ガイドをふくめ、情報環境利用マニュアルにおける日本語表現において、留意すべき点や注意点などについて具体的事例から検討する。

1 はじめに

大学の学術・教育環境においてコンピュータおよびネットワークの利用は必須となっており、各大学ともさまざまな工夫を凝らし、その基礎的な利用方法から情報セキュリティなどを含めてリテラシーにかかわる情報までを含むマニュアルを用意している。しかしながら、情報環境をめぐる技術的な進歩は常に急速であり、また利用者側のニーズもそれに併せて常に変容しており、大学情報環境の利用マニュアルは、記すべきコンテンツの取捨選択のみでも更新の際に膨大な業務が発生し、そのコンテンツの表現方法などまでは規格化や綿密な検討が十分に行われているとは言いがたい場合も生じている。本稿では、これらマニュアルにおける日本語表現について、筆者自身が業務のなかで気付いた点から、その方針の作成および具体的な表現における留意点について論じる。なお、教育に際してマニュアルをそもそも用いるべきか、あるいはコンテンツの構成をいかにすべきかといった、より上位の編集意志決定とそれに関わる日本語表現については論じない。

2 コンテンツ内容の把握

大学の情報環境利用マニュアルでは、はじめに述べたように、情報倫理の一般的な議論から、大学独自に提供するサービスでの実際の手順まで、非常に幅広いコンテンツを扱う可能性がある。この点が一般のマニュアルとやや異なる点であり、情報倫理や情報環境一般の教科書としての側面と手順書としての側面を持ちうるのである。このような状況で執筆者は、いかなるコンテンツを伝えたいか、ということのほかに、どのようにコンテンツを伝えたいか、

ということも併せて編集方針として念頭に置く必要がある。

手順の部分などでは、使い方を知らせるという第一義的な目的と、そのシナリオの流れを執筆者・読者とも共有している。したがって一般的なマニュアルと同様に、表現も統一的な体裁の維持や、またその評価が可能である。しかしそれ以外の部分、特に読者にとって必要な具体的な手順の説明でない部分では、読者に執筆意図が必ずしも自明ではなく、なぜ、どのように知らせたいのかを明らかにしつつ、執筆を進めなければ、読み飛ばされる危険がある。

たとえば情報倫理では、情報倫理一般を利用者に「紹介」するスタンスなのか、強く理解させるのか、情報倫理に悖る行為を強く戒めるのか、あるいは、すべて扱うとして、各部分でこれらの意志をどれだけ強く表出するかといったことを意識し、的確に表現に反映しなければいけない。一文でこれを扱おうとすると非常に曖昧な表現となる。「……する危険性がありますので、十分注意するよう努めてください」といった言い回しでは、読者の理解を損なうと同時に、執筆者の意図も明確に伝わらない可能性がある。「義務」「推奨」「中立」「回避」「禁止」といった諸要素によって表現はかわり、執筆者の意図によって使い分けと統一を図ることが重要である。

もちろん、どのような意図のもとに執筆するかは、各大学の利用者に対するスタンスの問題であり、利用者に対し、どの程度の信頼を寄せるか、あるいはどの程度のリテラシーを期待して、マニュアルを作成するか、といったことに左右されるが、執筆のポリシーとして、そのスタンスは全体に反映されることが望ましい。

3 執筆者の傾向の自覚

一般の商品のマニュアルなど、特に大学でのマニュアル執筆者が目にする機会の多いであろう情報機器関連のマニュアルは、総じてテクニカルライターの手になるものである。これらのテクニカルライターあるいは開発元企業は、市場調査などに基づく個々のマニュアル作成の評価書やガイドライン、指導書などをもち、マニュアル開発の技術者とも呼ぶうるものである。これに対して、大学のマニュアルは必ずしもテクニカルライターを専業とする者によって作成されているわけではない。たとえば早稲田大学の『PC・ネットワーク利用ガイド』は主にメディアネットワークセンターに所属する研究者たる助手が主に執筆・編集をしている。また他の大学でも、情報環境に責任を負う大学事務系列に属する技術者や、有志学生による執筆・編集である場合も少なくない。

このようなことから、マニュアル作成の基本的な日本語表現の訓練を受けていないことによる可読性の減少や、論文体や技術報告的表現の多用や長文化などが起こりがちである。読ませる工夫がコンテンツ内容やヴィジュアル化といった方向に集中し、文章の推敲が十分でない場合がある。カラフルできれいなマニュアルなのに文章自体は古色蒼然としたものであったり、非常に持つて回った表現や、客観的に過ぎて働きかけを感じさせないものになりがちである。特に長文化しているときは、主述の係り受けが複雑になったり、主語が重くなりがちであり、読者に読解のための努力を要求することになる。

4 可読性の向上にむけて

可読性の向上にあたっては、一般的な日本語文章作法と共通する点が多いが、本節では、前節で述べたような執筆者の属性に由来する注意点をあげる。特に多出するのは以下の3点である。

1. 可能性の表現
2. 指示語の見直し
3. 文語表現の解消

可能性の表現は、文を無用に長くし、文意のぼかしにつながることが多い。「～することができます」は「～できます」で済む。「～する危険性があります」「～する可能性があります」は、その結果、読者が行うべきこと、知っておくべきことを明確にし、前者では「何をしてはいけないのか」、後者で

は「どうすべきか、無視して良いか」といったことが書かれるべきである。

指示語は、登場するたびに読者に何を指すかを考えさせ、可読性を損ないうる。特に同一の指示語が段落内で多数用いられると、文意は非常に不明確になる。同一語の繰り返しであっても、特にくどくなければ指示語を多用するのは控えるべきである。

文語表現の解消は、特に論文執筆の多い執筆者が注意すべきことがらである。マニュアルでは内容のストレートな受容のために特に注意を要する。推敲にあたっては、より短く簡便な表現の可能性を探らなくてはならない。たとえば著しく頻出するものに「～において(は)」「～にて」があるが、通常「～で」で代用可能である。ほかに漢字を用いる表現となってしまう「～に関しては」「～については」「～を行った」は「～した」でいずれも代用できる。漢字名詞とサ変「～する」による語、たとえば「回避する」のような場合には「避ける」でよい。

これらは名詞を名詞として浮き上がらせ、文章をシンプルにする。また同時に「する」「行う」などが連続して、読解のリズムを崩れることを防ぐねらいもある。読者にとっては明確な文意の把握が容易となり、執筆者にとっては文語的・雅文的表現の戒めともなって、伝えたい内容とその意志をばかさずに記すことができるようになる。

ほかに長い修飾語(句)は避け、形容詞・副詞に係る言葉の直前に用いる、余計な受身表現を使用していないかなど、挙げるべき点が多い。

5 おわりに

文章は、マニュアルの中心となるコンテンツである。コンテンツ自体の取捨選択は非常に重要だが、一方で、文章そのものの表現の推敲は決しておろそかにしてはいけないことである。執筆者は、なんらかの日本語表現法のガイドブックを参照するなど、せつかくのコンテンツを読者に的確に伝達するよう努めることが重要である。

参考文献

- [1] 笠原健成、小林栄一、荒井真人、絹川博之「マニュアル校閲作業における文書推敲支援ツールの実適用評価」、情報処理学会論文誌 42 巻、5 号、2001
- [2] 高橋善文、矢野尚、田崎武信「分かりやすいマニュアルへの統計的接近」、計算機統計学 8 巻、1 号、pp.27-46、1995
- [3] 高橋迪良『マニュアルづくりのマニュアル』日本法令、1996